

第一回 新プラトン主義協会研究奨励賞 受賞作講評

新プラトン主義協会研究奨励賞選考委員会

序論

- 第一章 一者の不可知性と非存在性
 - 第二章 ヌースの作用による叡智界の形成
 - 第三章 一者からのヌースの発出
 - 第四章 一なるものからの展開としての認識
 - 第五章 一者との合一と真理認識
- 結論

本協会は、国際的水準における新プラトン主義研究の促進・発展を願って「新プラトン主義協会研究奨励賞」を創設した。研究業績の内容については、新プラトン主義に関わりをもつものであれば、時代（古代、中世、近代、現代）、地域（古代ギリシア・ローマ世界、ヨーロッパ世界、イスラーム圏を含むアジア世界）、分野（文献学、神話・宗教、文学、哲学、美学、歴史、科学、建築、音楽、政治など）は問わず、候補作を募った。

研究奨励賞選考委員会は、慎重かつ厳正な審議を重ね、運営委員会の承認を得たうえで、候補作の中から岡野利津子著『プロティノスの認識論——一なるものからの分化・展開——』（知泉書館、二〇〇八年、二二二頁）「文献一覧」「索引」を含む）+「凡例」「目次」を第一回受賞作として決定した。

【講評】

岡野氏の著作は次のような章立てから成る。

西洋において、二〇世紀半ばあたりからプロティノス研究は急展開することになった。それは、「未完のヌース」と呼ばれる教義と「二つの働き」と呼ばれるそれに関わる。岡野氏の著作は、西洋におけるここ半世紀ほどの研究成果を遺漏なく批判的に検討したうえで、独自の見解を示したものとして、国際的な研究レベルという観点からも高く評価できる。その一端は本書の主要部をなすと思われる第三章に見出せる。

周知のように、プロティノスの体系では、一者からヌースが、ヌースから魂が、魂から質料が発出するとされる。そのさい、「いかにして一者からヌースが発出するか」が問題になる。岡野氏は

これをたんに一者とヌースとの関係に限定された問題としてではなくて、プロティノスの体系全体を読み解くための根本問題と位置付ける。この問題の解明は、「発出」とは何か、「帰還」とは何か、そして発出と帰還とはどのような関係にあるかといったような問題の解明にも通じる。

著者は、「第二章 ヌースの作用による叡智界の形成」で「未完のヌース」について論じた後に、「第三章 一者からのヌースの発出」で「二つの働き」について詳細に論じる。「未完のヌース」という教義は、「未完のヌース」の一者への「振り返り」による限定というように、ヌースの成立をヌースの働きに即して説明するものである。一者からのヌースの発出・成立をいわばヌースの側から説明するものと言える。

では、一者の側からいかにしてヌースの発出・成立を説明するか。著者は一者の働きに、内的な（内に留まる）働きと外的な（外に派生する）それという二つを区別し、最終的に次のような解釈を提示する。

「一者は、その内観が『成熟完全の域にある』ことにより、自然、必然的に自己を対象化し外在化させるのであり、この外在化が一者の所謂『流出（発出）』である。そしてこのとき成立するヌースの自己直知は、事実上、外的な働きにおいて具体化された『一者』の自己観照なのである。従って、一者が反省的な働きへと自己を展開したものが、自己を直知するヌースである。」（一一九頁）

「一者」と「ヌース」とのこの関係構造は、そのまま「ヌース」と「魂」、そして「魂」と「質料」とのあいだにも成り立つ。こうして著者によれば、「反省的な自己意識を通じての一者からの万物の発出は、分節化、多様化への展開であり、差異のあるもの、個別的なものへの進出である」（一九一頁）ということになる。この著作のタイトル『プロティノスの認識論——一なるものからの分化・展開——』は、そのことを言い表わしている。

このように、一者からの万物の発出は、一者の反省的な自己意識を通じての自己分節化、多様化への展開であり、個別的なものへの進出であるとすれば、逆に、一者への帰還は、この個別性を捨て去って全体性へと戻ることである。著者は次のように言う。

「我々の一者への帰還はまた、この個別性を捨て去って全体性へと戻ることでもある。即ち、一者への自己意識の集中は、小なる自己の自己意識に固まることではなく、却ってより広大な意識世界に出ることを意味する。一者への帰一は、他と区別される小なる自己の限定を破って、その外に出ること（エクスタシス、脱自）である。一者はすべてを包む無限なる者であり、その及ばぬところはなく、すべては一者の内に存在している。」（一九一・九二頁）「傍点、評者」

こうして著者は、次のような驚くべき結論に達する。

「われわれの魂はヌースや一者の外に生ずるわけではなく、それらに包まれて、それらの内に生ずるのである。『魂はヌー

スの内にあり、肉体は魂の内にあり、ヌースは他の者（一者）の内にある。』そして、『この世界の場所』は魂である。というのも、一者からすべてが発するとと言っても、一者の外はもとから存在しないからである。一者の力が及ばぬ所はないのだから、一者の分化・展開は、一者の内で行われるのでなければならぬ。』（一五五頁）「傍点、評者」

著者は、「序論」で、「少なくともプロティノスの場合、彼の語ることを自己の内に探究する姿勢が何より必要である」（八頁）と書いて、探究を開始した。プロティノスの思想の真相は、その思想を可能なかぎり追体験するという仕方での探究によって明らかにされるということであろう。著者は、プロティノスの思想に深く沈潜し、その核心を生きいきとした姿で描き出すことに成功していると思われる。

研究奨励賞選考委員会は、主体的な探究姿勢を堅持しながら、原典テキストの緻密で精確な分析に基づいて、プロティノスの根本思想を生きたかたちで再現した岡野氏の業績を高く評価し、第一回目の「新プラトン主義協会研究奨励賞」に相応しいものと判断し、ここにその旨報告する次第である。

【文責：新プラトン主義協会研究奨励賞選考委員会委員長

小浜善信】